

序 章

《ワタン》というプロブレマティーク

岡 真理

ねえ、サフィーヤ、ワタンとは何か、きみは知っているかい。ワタンとはね、このようなことの一切が起こらないということなのだよ。

ガッサーン・カナファーニー『ハイファに戻って』より

2003年のイラク戦争によって、2007年までに400万人以上のイラク人が故郷を追われ、うち200万人以上が国境を越えて難民となった。¹ イラク人画家ハーニー・ダッラ・アリーも、そうした数百万のイラク人の一人だ。ヨルダンに渡った彼は、今も家族とアンマンで暮らす。2017年4月、日本でハーニーの個展が開かれた。展示された作品のほとんどが、直径50センチほどの円形の台紙——棗椰子の葉と茎を手で漉いてつくった特製の紙だ——に水彩絵の具で描かれた、抽象化された女性の胸像画だった。台紙は厚手の和紙のような手触りで、ところどころに棗椰子の繊維が浮かんで見える。オリーブの樹がパレスチナの大地とそこで育まれたパレスチナ人の生を象徴するとすれば、棗椰子はイラクの大地とイラクの人々の生の象徴だ。作品が円形をしているのは、毎朝、農村の母親たちが手ずから捏ねて、土でできた竈で焼いてくれるホブズ（パン）のイメージが重ねられているためだ（アラブのパンは一般に、平たくて丸い形状をしている）。「ラヒール・ワタン（祖国、我を去りて）」と名づけられたこの個展に、ハーニーは以下のような「ことば」を寄せた。

人間が生まれ、「母の胎内」という、それまで、これが自分の世界、自分のワタン（故郷）だと感じていた安らぎを失い、それに代わって、母と父の優しさに満ちた懷に抱かれて、それを自分の新たな世界として見出すとき。そう、これが私だ。私たち人は誰もこのような状態を手にする。すなわち、母、そして父、彼らこそがワタンであり、安らぎであり、安定なのだ。

若くして私の父は逝った。私にとり、母こそが私の唯一の世界であり、私の

¹ UNHCR “Statistics on Displaced Iraqis around the World”, April 2007, <https://www.unhcr.org/461f7cb92.pdf> (2019年3月8日閲覧)

唯一のワタンだった。母は働き、父であると同時に母であり、力強さであり優しさだった。母は神から「母親たちの足元にある天国」を与えられて然るべき人だ。母もまた逝ってしまったとき、母たちの一人ひとり、父たちの一人ひとり、偉大なもの、美しきもの、そして川と果樹園のあいだで過ごした幼年時代の思い出のすべてが、私にとってのワタンとなった。

祖国、我を去りて――

それは突然だった。ワタンは、その思い出、愛、棗椰子、太陽、大地、それら歓びのすべてを携えて、私から去ってしまった。私はべつの大地を探した。日々をそれで埋め合わせようと。そこにおいて、いつしか私自身が子どもたちのワタンとなり、彼らの護り手となった。父が私にそうしてくれたように。母が私にそうしてくれたように。

理性においても感情においても、私は知っている。私を決して見捨てない唯一の存在、人をこの地上に決して一人きりにしない唯一の存在があることを。それはいのち、すなわち「^{アッラー}神」であると。「神の大地は広い」。こうして私は知った。大地のすべてが私のワタンであり、私の家族とは、この大地の平和を愛するすべての善き人々であると。私たちはこの大地に招かれた客人であり、そしていつか私たちもみな、立ち去るのだということを。生きるとは「ラヒール」、旅立つことなのだ。

慈悲深き慈愛あまねきアッラーの御名において。「地上にあるものみなすべて、かりそめのものである」(聖クルアーン アル＝ラフマーンの章 26 節)

ハーニー・ダッラ・アリー

近代において、西欧起源の「ネーション」概念が中東世界でも受容され、それぞれの地でネーションの意識が涵養されるにともない、アラビア語で「郷里」を意味する「ワタン(وطن/watan)」の語は、「祖国」としてのネーション・ステイトをも意味するようになった(ペルシア語をはじめ中東の諸言語でも、アラビア語の「ワタン」に起源をもつ類似の語彙が「祖国」を意味するものとして用いられている)。個展「ラヒール・ワタン」における、母、棗椰子、ホブズ(パンを象った円形は同時に、胎児が安らぐ母の子宮をも表している)など、ハーニーのワタン・イメージを形象化した諸作品は、「イラク」という、戦争によって破壊され、失われた彼のワタン/祖国とそこにおけるかけがえのない生の表象である。一方でこの大地のすべてがワタンであると書き綴りながら、ハーニーは、彼の郷里/祖国であるイラクという固有のワタン

の固有の記憶を、その絵筆で形象化していた、イラクへの深い愛を込めて。愛…
…。ワタンの喪失が人間にかくも深いトラウマ的な痛みをもたらすのは、そこに愛が——ワタンと人間を深く結びつける感情的絆が——あるからだ。そうでなければ、失ったところでそれは、物理的、経済的損失以上のものではないだろう。「イラク人」ではなく、来世を信じる敬虔なムスリムであることこそを自らのアイデンティティに抱いて、神の教えに従い、この大地のすべてが自分のワタンであると、あるいは、地上の土地のすべてはかりそめのものに過ぎないとして生きようと決意する画家のありようは、ワタンの喪失が、アッラーという絶対的なものを対置することによってしか乗り越えることのできない、なにものによっても贖い得ない痛みであることを逆に物語ってもいよう。

アラビア語、ペルシア語、トルコ語という語圏の違いを超えて、中東世界の現代文学とは、なべて「ワタン」をめぐる文学である。この世界のいずれの国の文学にも、「ワタン（祖国）」をテーマにした作品はあるだろう。だが、それは、当該文学を構成する多様な作品群のなかの一部に過ぎないのではないか。しかし、中東現代文学の場合、ほとんどの作品を「ワタン」をめぐる言説として読むことができる。中東現代文学と「ワタン」は切っても切り離せない関係にある。

国境をつつがなく超えることができている限り、私たちは「国境」の存在をそれとして意識することはない。国境が、超えるに越えられない物理的障壁となって私たちの行く手に立ちふさがって初めて、私たちは「国境」の何たるかを理解する。同じように、国民であることの自明性を疑わず、昨日と同じ一日が明日もつつがなく訪れることを疑わず生活していける限り、「ワタン」は空気と同じように、とくに意識されることもない。「ワタン」が「ワタン」として敢えて言上げされるのは、「ワタン」なるものが人間にとって危機的クリティカルなものとして浮上するときだ。「ワタン」が陰に陽に中東現代文学のテーマとならざるを得ないのは、19世紀後半から21世紀に至る中東世界の近現代が、ワタンなるものを問わねばならない切迫した事態——植民地支配、戦争、独裁、亡命、内戦、難民化等々——に一貫して直面し続けているからにほかならない。ワタンをテーマとしない作品ですら、それがまさに「ワタン・フリー」であるという点において特記すべきこととなる。中東社会も中東文学も、「ワタン」という重力場から決して自由ではない。

「ワタン」と人間の関係性を解釈格子として中東現代文学を考察することは、つねにワタンなるものが問われ続ける近現代中東社会のありようとそこに生きる人間た

ちの生の姿を開示する。それだけではない。旧植民地出身者であるマグレブからのムスリム移民を「国民」として抱えるフランスにおける、たとえば1989年に始まる「スカーフ論争」は、「フランス共和国」を「ワタン」と考えていた移民2世、3世のムスリマたちに「ワタン」について再考を迫るのみならず（「スカーフ論争」とは彼女たちにとっての「ラヒール・ワタン」であったとも言える）、「ワタン」とは誰のものか、フランス共和国がワタンであるとは誰にとっていかなることを意味するのかなど、ワタンなるものをめぐって普遍的かつ根源的な問いを惹起せずにはおかない。2001年9月11日のワシントンとニューヨークにおける同時多発テロ事件後のアメリカ社会においてアラブ系アメリカ人や中東出身のムスリムのアメリカ人が直面したのも、同様の事態であった。あるいは、ガストアルバイターとしてやって来たトルコ系移民や、近年のシリア難民を大量に抱えるドイツ社会や、歴史的に大量の難民たちを迎え入れてきた北欧諸国は近年、排外主義が興隆し、レイシズムが顕在化している。現代世界は、それぞれの国、それぞれの社会が、それぞれの形で、「ワタン」なるものを根源的に問い返さざるを得ない、クリティカルな状況に直面している。世界の「中東化」と言える。中東文学におけるワタンと人間の関係性を考察することで、中東世界のみならず、「中東化する」この現代世界におけるワタンなるものをめぐる普遍的なプロブレマティークもまた見えてくるにちがいない。

このような問題意識から、中東現代文学研究会では、2012年度よりJSPS科学研究費補助金を得て、中東現代文学における「ワタン」表象をテーマに研究をおこない（基盤研究（C）「中東現代文学における「ワタン（祖国）」表象とその分析」2012 - 2014）、その基盤の上に、2015年度からは、分析対象を狭義の文学作品から映像テキストや絵画を含む文学・アート全般に拡大し、同時に、アラビア語、ペルシア語、トルコ語など中東諸語によって中東世界で生産される狭義の「中東文学」から、中東にルーツを持つ者によって欧米など地理的中東世界の外部で、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語など中東諸語以外の言語で生み出される文学にまで「中東文学」概念を拡張し、そこにおけるワタン表象について研究を重ねた（基盤研究（B）「現代中東の「ワタン（祖国）」的心性をめぐる表象文化の発展的研究」2015 - 2018）。7年間にわたる研究プロジェクトの総括研究会として、2018年6月9日、10日の2日間、東京大学東洋文化研究所を会場にシンポジウム「ワタンとは何か——現代中東における「ワタン（祖国）」表象をめぐる」を開催、この研究プロジェクトに参加した研究分担者、協力者らによる20本の研究発表がおこなわれた。そのときの議論を土台に、さらに加筆修正した論考をまとめたのが本書である。

本書はテーマ別に7つの章から構成されている。ワタンについて異なる角度から光を当てることで、「ワタン」なるものをめぐる普遍的なプロブレマティークを明らかにすることを企図している。以下、本書収録の論考について簡単に紹介したい。

第1章のテーマは「ワタンとエグザイル」。エグザイルとはワタンからの物理的追放であり、^{エグザイル}故国喪失者はそうであるがゆえに、物理的に喪失したワタンをつねに心中に抱えて生きることになる。1978 - 79年のイラン革命がもたらしたイラン・イスラーム共和国という新たなワタンの誕生は、数多のエグザイルを生み出した。中村は、革命によって国外移住を余儀なくされた詩人ナーデルプールの作品を丁寧に読み解くことで、詩人がそのエグザイルの生からいかなる思想を紡いだのかを明らかにする（中村菜穂「異郷のベルシア語詩 ナーデル・ナーデルプールの祖国（vatan）と異郷（ghorbat）」）。新たなワタンの出現がエグザイル——ワタンからの追放——を生み出す、それは、「ユダヤ国家」を標榜するイスラエルの創設によってパレスチナ人の身に起きたことであり、また、トルコ共和国の成立によってトルコに包摂されたクルディスタンのクルド人の身に起きたことでもある。トルコ共和国という新たなワタンが構築される過程で、クルディスタンのデルスィムでクルド人の民族浄化が起こる。磯部は、この出来事によってトルコ人家庭の養女となったデルスィムの孤児たちのトルコ語の証言に密着し、デルスィムという地理的郷里^{ワタン}から追放されたのみならず、クルド語という母語からも放逐された彼女たちが、その後の人生を何者として生きてきたのか——言い換えれば、何を彼女たちの「ワタン」として生きてきたのか——に迫ろうとする（磯部加代子「母語からの追放 あるデルスィムの孤児たちの物語」）。植民地の独立によって、それまで、その地をワタンとしていた植民者が追放されるという出来事も、新たなワタンの誕生が人間にもたらすエグザイル、ポストコロニアルの普遍的なワタン喪失体験のひとつだ。アルジェリアのフランス人コロニヤ然り、アフリカ諸国の白人植民者然り、朝鮮の日本人然りである。栗原論文が論じるのは、イタリアの植民地であったエリトリア（歴史的にオスマン帝国領であったエリトリアは、中東世界の周縁と位置づけることができる）で生まれ育ち、「祖国」イタリアへ「帰国」を余儀なくされたイタリア人作家にとってのワタンたるエリトリアの記憶であり、植民地をワタンとする植民者の、留保なく吐露することを禁じられた郷愁の想いだ（栗原俊秀「植民者の抱く郷愁 エリトリア生まれのイタリア人作家が描く〈故郷〉の姿」）。

新たなネイション・ステイトというワタンの誕生が、その土地に住まっていた人間にワタン/郷里からの追放をもたらすとすれば、ワタンと暴力は無縁ではない。第2章「〈祖国〉という暴力」では、ネイション・ステイトとしてのワタンの暴力性に着

目する。中東諸国は、共和制、王制の如何を問わず独裁体制である。2010年12月、チュニジアに端を発する体制打倒の運動が瞬く間に一連のアラブ革命となって波及した所以であり、また、中東現代文学に「監獄文学」というサブジャンルが存在する所以でもある。2011年に始まるシリア内戦は、アサド政権の残忍さを世界に知らしめたが、体制の暴力性は内戦で始まったわけではない。秘密警察に監視された独裁国家に生きるとき、政治犯として獄の中であろうと外であろうと、自らが祖国として生きる国家それ自体が巨大な監獄となる（岡崎弘樹「監獄としての〈ワタン〉 シリアにおける監獄文学の変遷」。「ユダヤ国家」イスラエルの成立は、パレスチナ人からワタンを奪い去ったが、シオニズムによってワタンを奪われたのはパレスチナ人だけではない。イスラエル創設後、この「ユダヤ人の祖国」にイラクから、アラビア語を母語とする多数のイラク人ユダヤ教徒が移住した。バビロン捕囚以来、2000年以上にわたりチグリス・ユーフラテスのほとりで——とりわけイラクがイスラーム化したのちはアラビア語で——歴史を紡いできた彼らは、イスラエルというユダヤ人の「ワタン」への「帰還」によって、イラクという歴史的なワタンを剥奪されることになった。天野論文は、自らのワタンを奪ったイスラエルという強制された「ワタン」に住まうことに抗い続けながら、しかし、結局はそこを終の棲家とせざるを得なかったイラク出身のユダヤ人作家、サミール・ナッカーシュの苦渋の生を辿りながら、終生、アラビア語で書き続けた彼の姿を通して「ワタン」とは何かを考える（天野優「ディアスポラという「ワタン」 ユダヤ系イラク人作家、サミール・ナッカーシュと祖国」）。植民地支配の軛から解放され、独立を遂げた国々のほとんどが、民主主義とは無縁だった。新生国家タンザニア（タンザニアはザンジバルとタンガニーカが統合されて誕生したが、ザンジバルは歴史的にオマーンに領有されていたことがあり、その意味でタンザニアも中東世界の周縁と見なすことができる）の国家エリートとして、理想に燃える知識人作家はやがて、タンザニア国家というワタンが、人民が生きるワタン/郷土の荒廃をもたらす矛盾に直面し、ふたつのワタンのはざままで引き裂かれることになる（小野田風子「新生国家エリートの孤独 タンザニアの作家E・ケジラハビにおける「ワタン」」）。

第3章「中東現代文学における〈ワタン〉の現在」では、トルコ、エジプト、アルジェリアに焦点を当て、それぞれの文学における「ワタン」表象の展開と現在について紹介する（宮下遼「『脱トルコ化』する物語 21世紀、トルコ・ポストモダニズム小説における「祖国」の解体」、福田義昭「現代エジプト小説における祖国(ワタン)像《断章》」、鶴戸聡「ナショナリズムに抗してネーションを構想する アルジェリア小説の展開と現状」）。

「女である私に祖国はない。女である私は祖国など欲しない。女である私にとって祖国とは全世界である」という『3ギニー』におけるヴァージニア・ウルフのことばは、中東のフェミニスト文学においてもこだまする。第4章「ワタンと〈性〉」では、女というジェンダー、女のセクシュアリティからワタンについて考える。国家が依然、家父長制を基盤としているかぎり、祖国の社会は女にとって監獄であり、真のワタンたりえない。たとえ祖国の地にあろうと、女はみな、エグザイルを生きていることになる。イランの作家パール・スィープールは、「男のいない女たち」と題した小説において、イランの5人の女たちの生と性を魔術的リアリズムで描き、その性表現ゆえに逮捕・投獄され、のちに亡命を余儀なくされた。作家自身の生が、女のセクシュアリティとイラン・イスラーム共和国という「ワタン」の抜き差しならぬ関係を体現しているわけだが、藤元論文は、このパール・スィープールの小説と、それを映画化した、イラン出身のフェミニスト・アーティスト、シーリーン・ネシャートの作品の比較を通して「祖国」について考察する（藤元優子「女たちのサンクチュアリと祖国 『男のいない女たち』に見る小説と映画の間」）。移民が移住先（ホスト国）の社会でいかにワタンとの関係を紡ぐかも、ジェンダーによって異なる。同時にそれは、夫に従ってワタンをあとにした女たち、母の世代と、移民先で生まれ育った娘の世代でも異なっていよう。アルジェリアから移民した女たちは、フランスという異郷で、故国といかに繋がっていたのか。石川は、「娘世代」である移民2世の作家、ヤミナ・ベンギギが母たちのワタンを描いた作品をとりあげ、自ら語る術を持たない移民1世のサバルタンの女たちにおける「ワタン」への郷愁を紐解く（石川清子「ラジオを聴くフランスのマグレブの母たち（とその娘たち） ヤミナ・ベンギギの作品から」）。佐藤が考察するのは、難民キャンプで生まれ、幼くして米国に移住し、ブルックリンで育った在米ディアスポラ・パレスチナ人詩人、スヘイル・ハンマードにおける「ワタン」である。シオニズムによるアラブ人に対するレイシズムとアメリカ社会における黒人差別、そして家父長制による女性差別という重層的な差別の結節点で詩人が夢想する帰還すべきワタンとは、新植民地主義による経済搾取を含め、あらゆる抑圧と差別から解放されたこの世界すべてである（佐藤愛「「うちへ帰りたい」スヘイル・ハンマードにおける「ワタン」と女のセクシュアリティ」）。

「ネイション（民族）」なるものが、近代という時代に生み出され、構築された「想像の共同体」であるように、ワタンとしてのネイション・ステイトもまた、近代において形成され、構築され、「想像の共同体」たるネイションによって分かち持たれるようになったものだ。ワタンの構築には、どのような要素、力学が関わっているのか。

第5章「ワタンの形成、ワタンの発見」では、人が生まれ育ち、直接的な繋がりを有する「郷里」を越えて、より広い地理的広がりをもった世界が「ワタン」としていかに認識され構築されるかについて、アゼルバイジャン、パレスチナ、湾岸地方を例に考察する。石井は、アゼルバイジャンのふたりの詩人の作品・言説を対象に、「アゼルバイジャン」が、隣国イランとの文化的歴史的関係性や、アゼルバイジャンを共和国として包摂する「大祖国」たるソ連との政治的関係性のなかで、ひとつの「ワタン」的実体としていかに形成されたかを考察する（石井啓一郎「バクーからタブリーズへ注ぐまなざし ふたりのソヴィエト・アゼルバイジャン語詩人にみるワタンの再定義」）。田浪は、英国委任統治下のパレスチナにおけるひとりの知識人の日記を丹念に読み解くことで、「旅」を通して、「パレスチナ」が彼のなかに「ワタン」の輪郭を取り始める過程を跡付ける（田浪亜央江「委任統治期パレスチナにおけるワタンの発見 「ハリール・サカーキーニー日記」に見る〈旅〉」）。湾岸諸国は、他のアラブ諸国と較べて国民国家としての独立が比較的近年の出来事である。竹田は、これら湾岸諸国で、正則アラビア語や湾岸方言という言語文化や、アラビア半島の砂漠の遊牧文化ないし湾岸の海洋文化に独自の固有性を見出すことで、「湾岸人^{ハリジー}」という地域アイデンティティが育まれるとともに、それぞれの国が国民アイデンティティの醸成に努めていることを論じる（竹田敏之「湾岸アラブ諸国における詩文化の興隆と国民アイデンティティの形成」）。

第4章の石川論文が論じるように、移民におけるワタンのありようは、世代によって異なる。移民1世にとってワタンとは、自らが生まれ育ち、やむを得ずあとにした故国のことだ。移民として迎え入れられた国は「外国」である。だが、その国で生まれた2世は、親たちの「ワタン」を話に聞くだけで、直接、知りはしない。だが、自分たちが生まれた国に十全な国民として帰属しているかどうかはまた、定かではない。第6章「〈移民第2世代〉とワタン」では、移民2世に焦点を当て、彼らとワタンをめぐる関係を取りあげる。細田は、中東諸国からイスラエルに移住したユダヤ人1世と2世の作家たちの作品を比較しながら、2世の作家たちがイスラエルを祖国としつつも、同時に両親たちの郷里・故国^{ワタ}に歴史的、文化的ルーツがあることを意図的に作品に反映させることで、イスラエルというワタンそのもののありようを異化しようとしていることを指摘する（細田和江「想像の「ワタン」 イスラエルにおける中東諸国出身ユダヤ人第2世代作家たちが描く祖国」）。移民先の社会では、移民たちと、彼らを迎え入れた者たちの出会いがあり、出会いがあればそこに、エスニシティの境界をまたぐカップルも生まれる。鈴木（克己）は、イラク出身のクルド人の父とドイツ人の母を持つ、父系の出自によるならば移民2世と位置づけられる（だが、母系の出自

で言えばドイツ人と外国人のダブルである) ドイツ語作家、シェルコ・ファタハをとりあげ、移民2世/文化的ダブルの作家が執拗にイラクという父の故国を物語の舞台に据えることの意味を通してワタンについて考察する(鈴木克己「Father land / Mother tongue ドイツ語作家シェルコ・ファタハにおける祖国と言語」)。文化を異にするホスト国で生まれた移民2世、とりわけ北米や欧州など歴史的にキリスト教を国民文化とする国に生まれたムスリムの移民2世は、自らの出自に由来するムスリムという文化的アイデンティティを涵養しつつ、いかにしてホスト国を自らのワタンとしうるだろうか。このとき、何が必要なのか。前田は、英語によるムスリム児童文学の分析を通して、ホスト社会において、ムスリムの子どもたちを主人公とする物語が書かれ、それが他者によって読まれ、自分たちの存在が可視化されることの重要性を説く(前田君江「子どもたちを「可視化する」物語 ファウズィア・G・ウィリアムズの「イードの物語」を中心に」)。

冒頭掲げたカナファーニーのことばをもじって言うならば、「このようなこと」が起こる限り、祖国はワタンたりえず、人は、真のワタンとは何かを問い続けることになる。第7章「ワタンを想像/創造する」では、この「ワタンとは何か」という問いに、作家たちがその作品と自らの生の実践を通してどのように応答したのか、ふたつの例を紹介する。「ユダヤ国家」イスラエルの建国という民族的^{ナクバ}破局ののちも自らの歴史的^{ワタン}郷土たる土地にとどまったパレスチナ人が経験したことも「ラヒール・ワタン(祖国、我を去りて)」だった。自らワタンを去ったわけでもないのに、そこは、ある日突然、ユダヤ人という他者のワタンとなってしまった。イスラエルのパレスチナ人はワタンにいながらにして異邦人、エグザイルの身となった。だが、ナクバのあとでもパレスチナを去ることなく、ハイファの街に終生とどまり続けたパレスチナ人作家、エミール・ハビービーにとってワタンとはパレスチナであり、とりわけハイファという都市にほかならなかった。山本は、ハビービーがワタンとしてのハイファについて書き続け、死してなおハイファにとどまりワタンの土に還ることで、何をもってしても彼からワタンを奪いえないことを、その生をもってシオニズムに対して証明したことを明らかにする(山本薫「ハイファにどとまる エミール・ハビービーのワタン(Waṭan/Homeland)」)。現に存在する、しかしワタンとして受け入れることのできない祖国を峻拒して、ヴァージニア・ウルフは「女である私に祖国はない」と語り——神の造りたもうたこの大地のすべてをワタンとして受け入れようとしたハーニーとは異なる形で——この世界すべてを祖国として想像したが、イランの女性詩人、スイーミン・ベフバハーニーにおいてワタンとは、現実のイランという国家がいかなる

ものであろうと、イラン以外にありえなかった。そして、彼女にとってワタンとは、イラン人自身の手によってつくりあげねばならぬものだった。鈴木（珠里）は、体制による弾圧にさらされながら、ハビービー同様、ワタンにとどまり続け、終生、イランに対する愛を高らかに謳い、ワタンを踏みにじる国家を批判し続けた愛国詩人の生と詩を通して、彼女が自らの詩作によってワタンをたゆまず創造し続けたことを力強く論じる（鈴木珠里「「再び君を造ろう、祖国よ」 スィーミン・ベフバハーニーの作品に見られるヴァタン像」）。

本書に収録された20本の論考を概観するだけで、ワタンなるものをめぐる数多のプロブレマティークが浮かび上がると同時に、ここからさらに掘り下げて考察すべき論点も多数、見えてくる。数例を挙げるならば、ワタンと〈性〉に関して言えば、「女」というマイノリティだけでなく、LGBTQにとってのワタンについても考える必要がある。また、石井論文からは、旧ソ連邦の人間にとって「ソ連」という「(大)祖国」は何であったのかという問題が惹起される。あるいは磯部論文、天野論文、竹田論文は、ワタンを「言語」という観点からも考察する必要があることを示唆する。課題は尽きない。本書は、ワタンをめぐる人文学的旅路の、最初の一里塚である。

今から8年前、^{ワタン}国が推進する原発推進政策の結果、福島の人々は原発事故によって郷里を失い、少なからぬ者たちがエグザイルとなった。半世紀前にパレスチナ人作家、ガッサーン・カナファーニーが小説『ハイファに戻って』の作品終盤に記した、「ワタンとは何か、きみは知っているかい」ということば、それは、作者がそのことばを直接的な宛先として企図したパレスチナ人のみならず、現代世界に生きる私たちすべてに差し向けられた問いにほかならない。

2019年3月11日記